

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12462

研究課題名（和文）プロジェクト重視の英語学習による小学校英語の4技能統合への実践

研究課題名（英文）Practice of Four Skills Integration in Project-Based Elementary School English Lessons

研究代表者

白土 厚子（Shirado, Atsuko）

東洋大学・文学部・助教

研究者番号：90782748

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、共通教材（We Can!）を使ったプロジェクト重視の英語学習を5,6年生児童に実践し、混合研究法で4技能統合への可能性を調べた。各プロジェクトはWe Can!の学習内容と言語材料を基に児童の興味・関心に適したゴールを設定し、ゴール達成の過程で児童に選択・決定の機会を与え、聞く活動から、話す、読む、書く活動へと4技能を重層的に無理なく配置した。2年間の研究の結果、4技能に対する参加児童の意欲・自信の向上と技能習得への肯定的影響や4技能統合の可能性が示された。これらの成果を基に、検定教科書を使ったプロジェクト重視の英語学習への実践的指導方法を報告書にまとめ、学会誌等で提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年度から3,4年生の外国語活動と5,6年生の外国語が全面实施となる中、言語的・情意的側面から4技能による児童のコミュニケーション能力の基礎育成へのプロジェクト重視の英語学習の成果に基づき、検定教科書を使ったプロジェクト重視の英語学習への実践的指導方法を示したことは、小学校英語改革の流れの中で不安を抱く教師を支援することにつながる。また本指導法は、児童の学習への自己関与を高め、協働でゴールを達成することで児童が達成感や満足感を得て、学習により意欲的に取り組めることから、早期の英語嫌いや児童間の英語力格差という小学校英語が抱えている課題解決への糸口となる可能性も高い。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the possibility of four skills integration in Project-Based English Lessons (PBEL) with the standard material, We Can!, on the fifth and sixth graders of an elementary school. The goal of each project was decided based on students' interests and the language and learning materials of We Can! In the process, each project gave the students opportunities to select and decide important things. Moreover, the project provided the students with activities from listening, speaking, reading, to writing in order and comfortably in the layered framework of PBEL. The data were collected in a mixed methods research design. The results of the two-year study showed the positive effects of the students' motivation for, self-confidence in, and development of the four skills, and the possibility of the students' four skills integration. Based on the findings, the researcher suggested the practical design of PBEL with English authorized textbooks.

研究分野：小学校英語指導法

キーワード：小学校英語 プロジェクト学習 英語教育 第二言語習得

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、蓄積してきたデータと文献研究を基盤に Project-Based Approach (PBA) を理論的根拠とするプロジェクト重視の英語学習が「聞く・話す」活動に効果的であるという結果を得てきた。さらに「研究活動スタート支援」では、プロジェクト重視の英語学習による4技能統合の可能性が認められ、プロジェクト重視の英語学習の枠組みも完成させた。一方「書く」学習では、認知的個人差に左右されやすく児童の負担も大きいことから、個々の児童の学習ペースを考慮した指導が必要となり、その定着にも時間を要することも分かった。そこで、児童が自己決定の機会により学習への自己関与を深め、英語で成果物を発表することで認知的満足感や達成感を味わい、英語学習の自信を高める指導法が一層必要になっていると痛感した。また、専科教員が十分でない現状では、担任の長所を生かした実践的指導法の提案も急務である。これらの課題解決にプロジェクト重視の英語学習が有効ではないかと考えるに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、令和元年度までに新共通教材 (*We Can!*) を活用したプロジェクト重視の英語学習が4技能によるコミュニケーションの基礎育成に与える影響を情意的・言語的に混合研究法で調査し、実施可能な指導方法を提案することであった。

### 3. 研究の方法

(1) まず、文部科学省の高学年用共通教材 (*We Can!*) を分析し、参加児童の興味・関心を基にゴールを設定し、各教材の3単元 (Unit) 程度の言語材料と学習内容を学期毎に22回前後の授業で1つとするプロジェクト重視の英語学習プランを学年・学期毎に作成した (表1・2参照)。

表1：5年生プロジェクト重視の英語学習年間計画

学期	<i>We Can!</i> 1	プロジェクト名	発表
1学期	Unit 1, 2, 6	留学生に自分の行きたい国を紹介しよう	交流会 (個人)
2学期	Unit 3, 4, 7	自分の家まで道案内しよう	学年/学級 (個人)
3学期	Unit 5, 8, 9	My Hero	学年/学級 (個人)

表2：6年生プロジェクト重視の英語学習年間計画

学期	<i>We Can!</i> 2	プロジェクト名	発表
1学期	Unit 1, 2, 4	留学生に日本と地域の良さを伝えよう	交流会 (班毎)
2学期	Unit 3, 5, 6, 8	将来の夢を話そう	交流会/学級 (個人)
3学期	Unit 7, 9	小学校の思い出と中学校のクラブ活動	学年/学級 (個人)

次に、実践校である東京都の公立小学校で移行期となる平成30年度と令和元年度の5・6年生に、主に担任とJTE(研究代表者)/ALTのチームティーチングでこれらのプランを実施した。両学年とも1学期は、英語で行う必然性を高め、コミュニケーションとしての英語を意識できるよう、学期末に同じ地域に住む大学の留学生との交流会を設定した。

(2) 調査は、今までの知見を活用し、第一次調査 (平成30年度) では、英語学習アンケート (英語学習への関心・意欲・自信)、Can-Do 自己評価アンケート (伝えようとする力)、アルファベットクイズ (文字認識力)、児童自由記述アンケート、担任自由記述アンケートで分

析を行った。その結果を基に調査方法を再検討し、第二次調査（令和元年度）では 聞くことクイズ（聞く力）、個別インタビュー（パフォーマンス評価）を加え7種類の分析ツールによる混合研究法で検証した。～ は量的分析で、統計処理には SPSS Statistics Version 21 を使用し、因子分析（最尤法、プロマックス回転）、*t* 検定、2 要因分散分析を用いた。と は質的分析で、KJ 法（川喜田、1967）に基づき、キーワードを抜き出しカテゴリー化する手法で行った。

#### 4. 研究成果

本研究の第一次・二次調査ともに、その分析結果はすべてプロジェクト重視の英語学習に肯定的であった。そのため、代表として第二次調査の6年生1学期の実践結果を報告する。

英語学習アンケート（10項目、4件法）（70人参加）

本研究共通の英語学習アンケートの因子分析の結果は、第一次調査の6年生同様2因子、(1)「関心・意欲」0.87 Cronbach's alpha と(2)「4技能に対する自信」0.91 Cronbach's alpha に分かれた。2要因分散分析の結果、主効果に有意な差 ( $F(1, 207) = 9.43, p < .01$ ) が見られた。単純主効果分析では、(1)「関心・意欲」(2)「自信」の因子それぞれに有意な差が見られた（表3参照）。

表3：英語学習アンケート2因子の単純主効果分析

因子	平方和	自由度	平均平方和	F 値	P 値
(1) 関心・意欲	0.78	1	0.78	10.01**	0.00
(2) 自信	0.61	1	0.61	7.77**	0.00

注) \*\* は事前事後の間の有意差 (P 値) が 0.01 より小さい ( $p < .01$ ) ことを示している。

Can-Do 自己評価アンケート（14項目、2件法）（69人参加）

学習内容への自己評価を調べるため、アンケートの質問は学期毎に異なるが、第一次調査の6年生1学期とは同じ質問項目で行った。因子分析の結果、(1)「既習項目」0.61 Cronbach's alpha と(2)「新学習項目」0.79 Cronbach's alpha の2因子に分かれた。2要因分散分析の結果、交互作用があった。単純主効果分析を行ったところ、2因子とも有意な差が見られた（表4参照）。

表4：Can-Do 自己評価アンケート2因子の単純主効果分析

因子	平方和	自由度	平均平方和	F 値	P 値
(1) 既習項目	1.42	1	1.42	42.45**	0.00
(2) 新学習項目	4.53	1	4.53	135.35**	0.00

注) \*\* は事前事後の間の有意差 (P 値) が 0.01 より小さい ( $p < .01$ ) ことを示している。

アルファベットクイズ（65人参加）

アルファベットクイズも学習内容に関して調べるため学期毎に異なるが、第一次調査の6年生1学期とは同じ問題で行った。第一次調査同様、表5から問4の味覚の音とつづりを意味とつなげる問題が少し難しかったが、それ以外は平均到達度が高いことが分かる。

表5：アルファベットクイズ問題毎平均到達度

番号	問1(6)	問2(4)	問3(8)	問4(10)	問5(10)	問6(4)	問7(8)	合計(50)
到達度	96%	93%	97%	86%	99%	97%	90%	94%

#### 聞くことクイズ (65 人参加)

プロジェクトのゴールでの児童の発表形式と同様、3 人の話し手が自己紹介の後、日本や自分が住んでいる町の良さについて話す。児童は、*We Can!* の Let's Listen 同様スピーチを聞きながら内容に合った数字やイラスト等を順番に線で結び、最後に Let's Watch and Think 同様、内容を日本語でまとめた。線で結ぶ問題の正解は、平均 23.35 問、平均到達度 96% だった (表 6 参照)。また、日本語でまとめる問題で各話し手の内容に 3 文以上で正しく答えられた児童は、65 人中 48 人で、全体の 75% だった。さらに、解答用紙を見直しただけではわからない解答をサポートする周辺情報を加えている児童も 65 人中 38 人いた。聞く力が育っていることが分かる。

表 6：聞くことクイズ記述統計

	度数	最小値	最大値	平均	標準偏差
線で結ぶ問題	65	18.00	24.00	23.35	1.50
内容記述問題	65	4.00	24.00	14.44	6.20

#### 個別インタビュー (68 人参加)

インタビューでは児童が留学生に紹介した内容について ALT が 3 つ質問した。事前に児童の返答に対する 3 段階評価のルーブリックを作成し、指導者間で共通理解を図った。また、学習者への過度な負担への配慮 (文部科学省, 2018) として、インタビューをする前児童にも、質問内容ではなくインタビューのトピックとルーブリックについて分かりやすく説明し、児童が不安なくインタビューに臨めるよう心掛けた。3 つの質問内容 (Content) に関する平均は、9 点中 8.84 で、平均到達度は 98.2%、パラ言語的特徴 (Paralinguistic factors) の clear voice と eye-contact も 6 点中 5.87 で、平均到達度は 97.7% だった (表 7 参照)。

表 7：個別インタビュー記述統計

	度数	最小値	最大値	平均	標準偏差
Content	68	7.00	9.00	8.84	0.44
Paralinguistic factors	68	4.00	6.00	5.87	0.38

#### 児童自由記述アンケート (68 人参加)

まず「発表では準備したことが伝えられましたか」の質問に 4 件法で答えさせたところ、「とてもそう思う」63%「まあまあそう思う」34%、「あまりそう思わない」3%で、97%の児童は発表後達成感や満足度を得ていることが分かった。さらにその理由を KJ 法で分類すると、発表時の自分の様子が最も多く、次に他者 (留学生) からの評価、今までの努力の成果、そして発表時の失敗の順であった。留学生からの評価が 2 番目に多かったことから、児童は相手意識、つまり「他者への配慮」をしっかりとって発表していたことが分かる。

#### 担任自由記述アンケート (2 人)

*We Can! 2* を活用したプロジェクト重視の英語学習については、「ゴールがグループ発表だったため、グループ内で自分の得意な仕事を見つけ英語に自信がない子も楽しみながら英語にふれることができた」「実際に『留学生に日本のことを伝える』というゴールが明確なため、子ど

もたちが活動に見通しを立てやすく、ほとんどの子が自信を持って行っていた」「様々な国の留学生に英語で伝えようとするこゝで、英語を使う意味を実感できた」等の意見にまとまった。

上記の結果を含む2年間の5,6年生の量的分析結果をまとめると、4技能に対する参加児童の意欲・自信や基礎的 skill への肯定的影響が期待できることが分かった。中でも、第二次調査で実施した「聞くことクイズ」と個別インタビューは、「意味のある文脈でのコミュニケーション」を意識した評価の一例として、児童の「知識・技能」を活用して目の前の課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」の評価につながると考えられる。よつて、から の分析ツールを用いたこゝで、4技能に関する総合的で言語的な評価を実施することができた。また、と の質的分析結果から、参加児童の「満足感」や「達成感」そして「学習意欲の高まり」「コミュニケーションの道具としての英語」の意識が読み取れ、PBA の特徴を生かした実践であったことが分かる。これにより、量的分析だけでは見えてこない児童の情意面での変化や担任の客観的評価や観察による分析結果を得るこゝで、より豊かで深い考察へとつなげることができた。

これらの結果に基づき本研究の成果について考察する。まず、共通教材を生かしたプロジェクト重視の英語学習の可能性が示された。共通教材のように児童にとってすでに決められた学習内容であっても、児童の認知レベルや興味を最もよく理解している担任が児童の身近なトピックや関心事、さらに地域のリソースを生かしながらゴールを設定し、必要な単元を組み合わせたプロジェクトをデザインできることが分かった。しかもその過程で、児童に選択・決定の機会を与えるこゝで児童の自己関与の度合いが高まり、学習意欲が増すと考えられる。例えば、6年生1学期の「留学生に日本と地域の良さを伝えよう」のように、「留学生に発表する」というゴールを児童に意識させ、日本や地域のお勧めの行事、食べ物、場所を自分たちで調べて決めさせたこゝで学習意欲が高まり、それが班活動への積極的参加を促し、伝わった時の満足感や達成感をより一層高めたと解釈できる。しかも、共通教材で学習した表現をゴールの発表に使うこゝで、慣れ親しんだ表現を基に自分たちの発表を考えられるという安心感と教室の学習が実際のコミュニケーションにつながっているという学習の効果を児童に実感させることができた。また、初めて会う同じ地域に住む留学生にその地域の良さを伝えるという状況が、英語で自己紹介や自分たちが調べたお勧めスポットを伝える必然性を生み出し、発表や発表後留学生の質問に答えようとするこゝで、PBA の特徴である「意味中心の目的のある言語使用」を可能にした。留学生の反応や評価に、児童が伝わったという達成感や満足感を得ているという児童の自由記述アンケートの分析結果からも明らかである。つまり、教室の学習が外の世界とつながっているという意識を持たせることができた。「英語をコミュニケーションの道具として実感させることができた」という担任の評価もこれを裏付ける。もちろん、「意味中心の目的のある言語使用」は留学生を相手にするだけとは限らない。地域の人々、保護者、下級生、同じ学年の友だちなどプロジェクトのゴールに適したコミュニケーションの目的によつて、様々な設定ができるであろう。また、プロジェクト内の一連の体験的学習により、新学習指導要領で重視される「外国語を使って何ができるようになるのか」の視点を今回の参加児童に、分かりやすく示すこゝもできた。

さらに、PBA の特徴を生かす枠組みで無理なく4技能を使う機会を設定できた。本研究の分析結果から、音で繰り返し慣れ親しんだ語彙の中から発表に必要な情報を読み書きの対象としたこゝで、児童にとって必然性のある学習となり、定着にもつながったと推測できる。よつて、4技能統合の可能性が示された。今後は、さらに検定教科書を使ったプロジェクト重視の英語学習の研究を進めるとともに、本研究の成果と具体的な指導方法をまとめて作成した報告書を生かして、プロジェクト重視の英語学習を多くの実践の場に広めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 白土厚子	4. 巻 19
2. 論文標題 We Can!を使ったプロジェクト重視の英語学習の実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JES Journal	6. 最初と最後の頁 4-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Atsuko Shirado	4. 巻 40
2. 論文標題 A Project-Based Approach to Elementary School English Education:Teaching Four Skills to Sixth Graders	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論集（INQUIRY）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Atsuko Shirado	4. 巻 64
2. 論文標題 The Effects of Project-Based English Lessons with We Can! 2 on Sixth Graders	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Tsuda Review	6. 最初と最後の頁 51-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 白土厚子・関麻由美	4. 巻 52
2. 論文標題 小学生と大学の交換留学生との交流授業における新たな意義 2020年の英語（外国語）教科化へ向かう中でー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 津田塾大学紀要	6. 最初と最後の頁 239-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 初等英語教育におけるプロジェクト・ベースト・アプローチ：量的・質的分析に基づいて
3. 学会等名 津田塾大学英文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 We Can! を使ったプロジェクト重視の英語学習の実践 移行期6年生の試みー
3. 学会等名 小学校英語教育学会 (JES)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 移行期5年生へのWe Can! の導入 プロジェクト重視の英語学習を基に -
3. 学会等名 全国英語教育学会 (JASELE)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 We Can! を使った1年間のプロジェクト重視の英語学習ー移行期6年生の1年目の実践ー
3. 学会等名 小学校英語教育学会 (JES)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 We Can! を活用した移行期2年目6年生の実践-移行期1年目の同じプロジェクト重視の英語学習と比較するー
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会 (KATE)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 1年間のWe Can! を使った移行期5年生の実践ープロジェクト重視の英語学習ー
3. 学会等名 全国英語教育学会 (JASELE)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白土厚子
2. 発表標題 移行期2年目の6年生への言語的評価の試みー意味のある文脈でのコミュニケーションを意識してー
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「プロジェクト重視の英語学習による小学校英語の4技能統合への実践ー2018～2019年度若手研究報告書」作成
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----